

氏名	加藤博也
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 4061 号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	医歯学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目	Long-term outcomes of endoscopic management for biliary strictures after living donor liver transplantation with duct-to-duct reconstruction (胆管-胆管吻合による生体肝移植後胆管狭窄に対する内視鏡治療の長期成績)
--------	--

論文審査委員	教授 三好新一郎 教授 小出典男 准教授 猶本良夫
--------	---------------------------

学位論文内容の要旨

胆管-胆管吻合による生体肝移植後の胆管狭窄は術後の予後に関わるものである。本研究では、この胆管狭窄に対する内視鏡治療の長期経過と治療の不成功に関与する因子を解析した。対象は2001年4月から2007年5月の期間に、岡山大学病院で施行された胆管-胆管吻合による生体肝移植96例中、吻合部狭窄を発症した41例。これらの症例に対し内視鏡的逆行性胆管造影を行い、ステント留置を行った。内視鏡によるステント留置で臨床的に改善が見られない場合は経皮経肝胆管ドレナージを併用した。41例中35例(85%)で内視鏡単独、あるいは内視鏡と経皮処置の併用により臨床的に改善が得られた。臨床的に改善した35例のうち28例で狭窄が改善したと判断してステントを抜去したが、7例で再狭窄が見られたためステントを再留置した。多変量解析を行うと、胆汁漏の合併が内視鏡治療不成功の要因となる可能性が示唆された。

論文審査結果の要旨

本研究は、胆管-胆管吻合法を用いた生体肝移植後の胆管狭窄に対する内視鏡的ステント治療の長期経過と治療の不成功に関与する因子を解析したものである。本研究者は、吻合部狭窄を発症した41例を対象として内視鏡的逆行性胆管造影下にステント留置を試み、改善がみられない場合は経皮経肝胆管ドレナージを併用することにより、合計35例(85%)に改善を得ている。この35例中28例で狭窄が改善したと判断してステントを抜去したが、7例で再狭窄が発症したためステント再留置が行われた。多変量解析の結果、胆汁漏の合併が内視鏡治療不成功の要因となる可能性がある結論している。術後胆管狭窄は生体肝移植の予後に関わる重大な合併症であり、その対策としての内視鏡的ステント治療の有効性と限界を示した本研究は臨床的に重要な価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。